林の中の晩餐会

城 夏子

城 夏子

林の中の晩餐会

講談社

林の中の晩餐会

定価1100円

昭和56年11月25日　第一刷発行

著　者　城　夏　子
発行者　三　木　章
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽 2-12-21
電話東京03(945)1111(大代表)
振替東京 8-3930

印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　大製株式会社

Natsuko Jō 1981 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

ISBN4—06—130781—9　(文2)

目次

あっちゃん・とっちゃん・かっちゃん ……7
荒行のひと ……14
蟻の匐うような字で書かれた恋愛論 ……21
イギリスの井伏鱒二 ……29
一点ピリッと胡椒がきいて ……35
うちの看護婦さん ……41
永遠に新緑の人・佐藤春夫 ……51
絵のような字の書翰八十三通 ……58
学生服の地平さん ……64
カール・ベームの笑顔 ……67

奇妙な作家尾崎翠（おざきみどり）との縁 …… 72
心のダンディー・堀口大学 …… 82
サマルカンドの王様みたいな …… 88
十八歳も悪くない …… 91
昭和初年の文士たち …… 95
白い馬・モツアルト・窓の絵 …… 101
清新ハイカラな作品「地中海」の作者 …… 107
聖路加病院の冷麦 …… 118
背中とかかと …… 124
その時たい子さんの、黒くて長い髪を―― …… 128
高群逸枝と「婦人戦線」の人々 …… 136
タクシー快談 …… 145

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

竹久夢二私見……149
トランクをさげた金子光晴……158
巴里男のギランさん……164
パンジーの押花と老詩人……166
畑山さんの家族……178
ひょろりと高い北村秀雄のこと……184
ヘラクレス二十五歳・カサブランカ三十七歳……189
まごころ先生ご健在……192
最もチャーミングなさよならをするひと……197
わがコイビト・森繁さん……202
「わたしの女満別開拓史」……211
林の中の晩餐会（著者執筆年譜）……220

装画　染木煦（そめきあつし）

「シュメッテルリンゲ」

装幀　小高辰也

林の中の晩餐会

あっちゃん・とっちゃん・かっちゃん

わが死期は百合のラッパでそっと告ぐ　　利女

こんなに胸打たれた句を、私は知らない。やがて迎える死を、こんなメルヘン風な、こんな愉しい詩の形で受けとめた人が、あっただろうか。

――ええ、句も絵も木彫りも、書も、みんな六十から始めました。みんな六十の独り手習いよ。先生なしよ。もっとも、絵はごく若い頃ちょっと日本画習ったけど。

胸に花の刺繍をしたジーンズの上下が、ぴたっと似合って、一層若々しさを感じさせる不思議な八十五歳である。そのお妹さんが私と同じホームにいられて、ある日私に、紫と水色と金という色調の木彫りの蝶のブローチを、姉の作品なの――とくだすったので、急にその工房が拝見したくなり、お訪ねしたのである。

――これはカステラの箱。

――これは生うにののっかってたあれ。

——これは古びて捨ててあった豆簞笥。

——これは親しい方の赤ちゃんが、産湯を使ったタライの底。その赤ちゃん、もう四十四です。

——これはお歳暮の鮭の入ってた箱のふた。

——これ、おそばやの箸立てだったのよ。

——これ一合枡三つくっつけたの。ブローチやボタンを、ポンとほり込んどくのよ。

というふうに、ただもう私をアレヨアレヨと眼を見はらせるばかり。タライの底には華麗なヒマワリが咲き、豆簞笥の引き出しには、一つ一つに羽子板、手まり、椿、羽根、折鶴を彫ったり塗ったり。室内に渦巻く色は碧、朱、青、紫、金、などが主となっているが、一つの例外は、カステラの箱に彫った菊と井桁。

薄墨いろに塗って、見事な大島絣である。

あのマッチ箱二つつないだほどの、生うにをのせてある板きれの、ぐるりの一センチ幅の枠が面白くて、私は朱のエナメルなんか塗ってピーナッなどのせているが、こちらはふちを丹念に彫り、彩色して、なんと小さい写真立てに化けさせている。

なにしろ当今は身辺に木製品が少なくなっているので、生うにの板きれまで動員される

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ことになる。この秋は個展を催されるとかで、木を求めて深川の木場まで出かけ、節があるために使いものにならないという木を、適当な大きさに幾枚も切り揃えて貰ったというおつむのよさである。それに、世界各国の風俗をした少女を一人ずつ彫ってあった。これに色がついたら、まあ……と、私は今から秋を待っている。

それにしても、木彫の手始めは、お孫さんが小学校で使っていたゲンゴロウと呼ばれている五十円位の刀だったとは。

――これ、男ものの仙台平の袴の裏地でしたの。

と取り出されたのは、グレイの地に白で図案風にびっしり刺繍をした帯。

裾まわしをはぎ合わせて染め、百人一首を片っぱしから乱れ書きした茶羽織のみやび。

さてこの甦生大臣みたいな老女史は、ジュール・ルナアルの名訳者であり、劇作家の、岸田国士の令妹、岸田利女である。

老いゆかばまた老いなりの初鏡　　利女

右は一九八〇年夏、サンケイ新聞に連載した随筆〝さまざまな晩年〟のある日の分である。

岸田利女はまた、明治四十三、四年頃、東京府下大久保村百人町に幼い私が住んでいた頃、よく可愛がって下すった七、八つ年長のとっちゃんなのである。軍人さんの岸田家は、わが家と眼と鼻の間にあった。当時の大久保は、軍人、文化人などの多い、しいんとした邸町だった。国士、佐二、虎二の三男と、彰子、利子、克子、朝子の四女がいた。薩摩琵琶の上手なお母さまはこの四人を、あっちゃん、とっちゃん、かっちゃんと呼んでいらしたので、(末の朝子さんは当時まだ赤ん坊だったので、私には記憶がない)私も真似して、ずっと年上のお姉さん方を、あっちゃんだのとっちゃんだのと呼んだ。かっちゃんは私より三つ位年下だったが、かっちゃん数の子と呼んでよく遊んだ。岸田さんのおばさんは、ほんとに私を可愛がって下さるので、毎日遊びにゆき、遂に琵琶歌まで教えて頂いた。そして神田の何とかいう小さい演芸場で発表会が開かれ、私もまあ、おめず憶せず、とっちゃんと一緒に舞台に上って、お母さまの琵琶にあわせて〈金剛石も磨かずばア……など歌ったのである。

私は小学校三年の時、一人だけ小田原の本家の方へ引きとられたので、岸田家のみなさ

んとは以後全く消息を断っていたが、あれは二十代も終る頃だったか、中央沿線阿佐ヶ谷にいた頃、同じ阿佐ヶ谷住まいの虎ちゃん（三男の虎二さん）にめぐりあった。虎ちゃんとは同じ寅年で、よくケンカもした。新劇俳優岸田森はその長男である。

国士さんは大久保の頃は、士官学校にいて家を離れていられたから、私は知らなかったが、軍人にならず、フランス文学者になった岸田国士を、昭和六、七年頃私は屢々訪問するようになった。というのは、その頃私は、文芸雑誌「文学時代」の社外記者として、カメラマンをつれてよく作家訪問をし、月々のグラビヤ頁をこしらえていたからで、私が幼い頃、岸田家のみなさんとおなじみだったことを知った夫人は、大変優しく心を配って下すったことを忘れない。美しく聡明で知られた夫人は、鉄砲百合みたいだったと私はなつかしんでいる。

さて、つい二年ばかり前、私がこの老人ホームの部屋から庭へ下りていった時、二人の見知らぬ婦人が、にこやかに挨拶して下さった。

――あの、どちらさまでしょうか。

――延原克子です。しばらく。妹の朝子よ。

びっくりした私はいきなり両手をとって、

――かっちゃん数の子！

と呼びピョンと一つ翔んだ。かっちゃんは、シャーロック・ホームズの紹介者として、また探偵小説雑誌「新青年」編集長として知られた、延原謙未亡人である。延原氏は晩年の十年を、高血圧で寝込み、克子夫人はその間、頑固で怒りんぼの夫君の看護を見事になし終えたと、中島河太郎氏などを感動させた人である。お子さんもなく、老後の安泰を願って、私のいる花だらけの老人ホームへ入られたのだった。十年間を気むずかしい病人にかしずいた人らしくもなく、なんとものほほんとした七十五歳で、華やいだおしゃれがよく似合う。うれしい老いっぷりである。妹さんの朝子さんは、私には初対面である。

かっちゃんの部屋を訪ねたら、なんと、蛇だらけ。壁飾り、置物、そして服地には三角模様が多い。つまり蛇のうろこだからである。きっかけは、延原氏が仆れてから二年目ぐらいに、蛇がお守りになると聞き、巳年ではあるし、そろそろ集め出したという。そして蛇は、ともかくも仆れた人の命を十年守ってくれたと克子夫人は信じて、益々蛇にまごころを捧げ続けている。末の朝子さんは、インコを上手にしゃべらせて愉しんでいる。インコの名はゴーちゃんである。加藤剛のファンなので、そういう名をつけたという。

一番上のあっちゃんには、これも偶然、私が常盤台（ときわだい）にいた頃の知人が、あっちゃんと親

しくしていて、私の噂が出、是非一度と伝言があって、何十年ぶりにお訪ねしたことがある。

――やっぱり幼顔(おさながお)が残ってらっしゃる。

とあっちゃんは言い、私は、あっちゃんは琵琶を弾かれたおかあさまそっくりだと思った。

というように、人間にはどうしてもつながる縁というものがあるらしい。克ちゃんなんかカズノコ時代から何十年の空白を経て、晩年に一つ敷地の中で余生を共にしているわけである。縁は異なもの味なものである。

荒行のひと

「城さんったら、初めてわたしが女流文学者会の例会へ出た時の、まあ、つんけんしてたこと」と、ついこないだも思い出したように言って、寂聴尼瀬戸内晴美は愉しそうに笑った。愉しそうに笑ったというのも、私が今、誰よりもその寂聴尼を好き頼っていることを、承知の上の笑いなのである。

私が瀬戸内さん、瀬戸内さんというようになったのは「田村俊子」を読んでからである。

ほんとにまあ私は、まるまる二十歳も年下の瀬戸内晴美という同業の女性に、雨につけ、風につけ、と言ってよいほど世話になり、相談相手になって貰うようになって、かれこれ十七、八年になる。この人の友情は、十年前よりも五年前、五年前よりも三年前、三年前よりも現在と、実にさりげなく深まって来ている、こんな手ばなしの友情のろけも言いたくなる友である。生涯に一人だけそういう友を、しかも娘みたいな年齢の友を得た仕合せ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.